

令和元年6月11日現在

機関番号：12608

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K16638

研究課題名(和文) 西洋文化における能の受容と発展 アメリカとヨーロッパの作品をたどって

研究課題名(英文) Reception and Development of Noh in Western Countries: Noh Training Projects and English-Language Noh Plays in the U.S. and Europe

研究代表者

安納 真理子(Anno, Mariko)

東京工業大学・リベラルアーツ研究教育院・准教授

研究者番号：80706408

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は国内外の能指導プログラムと英語能を対象とし、能が西洋文化においていかに受容され、発展したかを明らかにした。予備調査として能楽師から能の稽古を受け、能指導プログラムを参与観察し、指導法を比較した。同時に英語能の資料収集、作者への創作過程に関するインタビューを行い、テキストを能の多様なリズムに乗せる手法について分析した。調査の結果、多くのプログラムは仕舞を部分ごとに説明し、西洋的な教育法を取り入れ、学習者を増やしていると判明した。また、英語能創作にあたり作家が能のリズムを理解する必要性が明確になった。以上を踏まえ、英語能創作の助けとなる『英語能の音楽の手引き』(『手引き』)の執筆を進めた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は能と日本の伝統芸能の可能性を現代に生きる英語能に見出し、研究成果を日本を始め世界に発信している。能の観客の高齢化や、若い観客の減少により、能楽師も芸能の将来について危機感を感じている。そのような状況下で本研究は、次の時代の研究者や観客の育成、能の学習者の増加、能の普及にも寄与している。加えて2020年の夏季オリンピックの開催や新天皇の即位によって、海外から日本への関心が高まり、文化や芸能も注目を集めている。その中で能を学びたい海外の人々の受け皿となるのが能指導プログラムである。『手引き』の出版で、国内外で英語能を創作する手助けをし、これらの活動を通して海外と日本との交流を促進させたい。

研究成果の概要(英文)：This study investigates how Noh is received and developed in Western countries by examining teaching methods at Noh Training Projects (NTPs) in and outside of Japan and analyzing the collaborative processes used to create English-language Noh. Preliminary research included: receiving Noh lessons from professionals; making a comparative analysis between traditional Noh transmission methods and NTP instructional techniques; and interviewing librettists and composers who create English-language Noh. I argue that NTP instructors incorporate traditional and Western methods, such as dividing long shimai (dances) into smaller sections in dance classes, making the learning process more manageable for students. Furthermore, I posit that it is imperative for librettists to have a basic understanding of Noh rhythms when writing an English-language Noh. Therefore, I am completing my book manuscript, A Handbook on English-Language Noh Music, to assist in the creation of future Noh works in English.

研究分野：音楽学

キーワード：能楽 英語能 能指導プログラム 伝承 教育 教育法 参与観察 異文化教育

1. 研究開始当初の背景

本研究開始以前は、英語能の作品研究と創作過程の解明と音楽分析を中心に研究してきた。英語能は新しい楽劇であり、そのパイオニアであるアメリカ人で武蔵野大学文学部教授リチャード・エマートの定義によると、日本の伝統としての能の構造・形式、音楽の手法を用い、英語で上演する能であり、演者も能の指導を受けているものを指す(エマート 2011 年、258-259 頁)。しかし、英語能がどこまで古典能の技法を用いているか、どのように英語のテキストが能のリズムに乗せられているかを解明するような音楽分析、英語能の「謡本」(スコア)ができるまでの作家と作曲家の交流過程、また演出家と演者や囃子方が舞台を作り上げる過程を追究する研究などはなかった。さらに英語能における演者の経験などへの言及もなかった。本研究の予備調査として英語能の上演のフィールドワークを行い、作家、作曲家、演者や囃子方にインタビューを実施した。また、演者や囃子方の能に関する経験を調査するため、エマートが能の指導者として関わっている主に外国人向けのアメリカの能指導プログラム Noh Training Project-Bloomsburg (NTP-B、別名 NTP US)と、国内における Noh Training Project-Tokyo (NTP-Tokyo)の参与考察を行ってきた。

2. 研究の目的

本研究は、アメリカとヨーロッパにおいてどのように能が受容され、どのように発展したかを比較し、その実態を明らかにすることを目的とした。具体的には、国内外における外国人向けの能指導プログラムを参与観察し、その指導法を比較した。加えて、能指導プログラムに長年参加した学習者が英語能団体「シアター能楽」(TN)の英語能の上演に関わっている傾向も見られるので、これらの能指導プログラムと、メンバーが上演した英語能の作品を比較対照した。指導プログラムにおける教育法は指導者によって異なり、また能に対する感性、美的意識、価値観などは、英語能における作者・作家の背景によって異なる。そのため、指導者や作者・作家たちが、学習者や観客に何を伝えようとしているのかを、分析を通じて解明することに焦点を当てた。さらに、それらの内容がどのように作品の題材、音楽、テキスト、装束、面などに反映されているかを明らかにした。英語能の研究成果として『英語能の音楽の手引き』(『手引き』)の執筆を進めた。これらの結果によって、外国人や日本人の能の学習者を増やし、能の普及に寄与することを意図した。

3. 研究の方法

本研究は、今までの研究成果を土台とし、①国内外の能指導プログラムにおける教育法を比較分析し、②英語能作品の作品収集と音楽的特徴を追究し、研究代表者自ら英語能の創作に挑戦することを試みた。そのため、主として以下の二つの研究方法をとった。

まず①国内外の能指導プログラムの情報を収集し、参与観察した。それは実際にプログラムの指導者から学び、他の学習者と舞台上での上演に参加することで、指導者が学習者に学んでほしいことが言葉や指導法で強調されると考えたからである。また、学習者の立場から民族誌的アプローチをとり、指導者や学習者の許可を得て、インタビューを実施し、プログラムのディレクターにはプログラムの目的、趣旨や活動、指導者には学習者への指導目標や本人自身の教育法や価値観、学習者にはプログラムに出席した理由などについて尋ねた。本研究で参与観察ができなかったプログラムや中止されたプログラムに関しては、資料収集をし、指導者にインタビューを行った。研究対象となった国内外の能指導プログラムは、以下の通りである。(なお、プログラムは結成年の古い順に記載している。)

【表 1】国内能指導プログラム (参考文献：ペレッキア 2015 年、49-60 頁；

<http://nohtrainingprojectuk.org/>; <http://www.kac.or.jp/program/20474/>;

<https://www.theatrenohgaku.org/noh-training-japan/power-through-resistance-noh-chant-movement-instruments>; <https://www.theatrenohgaku.org/noh-training-project-us>)

	能指導プログラム	結成年	創立者	場所	開催頻度
1	トラディショナル・シアター・トレーニング (Traditional Theatre Training, TTT)	1984	J.サルズ、 茂山あきら	京都	夏の三週間のみ
2	国際能楽研究会 (International Noh Institute, INI)	1986	宇高通成、 R.ティール	京都	通年
3	能・トレーニング・プロジェクト・東京 (Noh Training Project-Tokyo, NTP-Tokyo)	1991	R.エマート	東京	通年
4	能・トレーニング・プロジェクト・東京、別名 Noh Training Tokyo。	2017	喜多能楽堂、 シアター能楽	東京	夏の三週間のみ

【表 2】 国外能指導プログラム（参考文献：ペレッキア 2015 年、49-60 頁；

<http://nohtrainingprojectuk.org/>; <http://www.eu-nohgaku.com/ryokuranact.html>;

<https://internationalnohinstitute.wordpress.com/about-us/ini-representatives/>;

<https://www.theatrenohgaku.org/noh-training-project-us>)

	能指導プログラム	結成年	創立者	場所	開催頻度
1	能・トレーニング・プロジェクト・ブルームズバーグ (Noh Training Project-Bloomsburg、NTP-B。別名 NTP US。)	1994	R.エマート、E.ダウド	アメリカ	夏の三週間のみ
2	国際能楽研究会 (INI)、ミラノ支部	1998	M.アルノー	イタリア	通年
3	緑蘭会 (Ryokurankai)	2009	松井彬、中欧能楽文化協会	ポーランド	近年、指導者は訪問できず
4	能・トレーニング・プロジェクト・UK (Noh Training Project United Kingdom、NTP UK)	2011	R.エマート、A.ソープ	イギリス	夏の三週間のみ

【表 1】 国内プログラムの 1 と 2 は、研究代表者の業務上の都合のため調査が行えなかった。しかし国内 1 の TTT は、ウェブサイトが充実しているため、そこから情報を得られた (<http://www.kac.or.jp/program/20474/>)。その情報によると、1984 年にアメリカ人で龍谷大学国際学部教授ジョナ・サルズと大蔵流狂言師・茂山あきらが立ち上げ、2000 年より京都芸術センターで行われ、2015 年よりアメリカ人のケンブリッジ大学助教授マシュー・ショアズがプログラム・ディレクターを務めている (<http://www.kac.or.jp/program/20474/>)。またショアズは、2016 年 7 月 30 日、東洋音楽学会西日本支部、第 273 回定例会研究会の特別講演で「京都でまなぶ、理解する日本芸能の意味—トラディショナル・シアター・トレーニングの活動を事例に」という題目で発表しており、TTT の活動についても触れている (井上 2016 年、2-3 頁)。

【表 1】 国内 2 の INI も、イタリア人で京都産業大学准教授ディエゴ・ペレッキアの尽力でオンラインのプレゼンスが大きい (<https://internationalnohinstitute.wordpress.com/>)。INI の国内外の活動には、研究代表者も出席したが、野上記念法政大学能楽研究所の能楽セミナー「能楽の現在と未来」の「現代に生きる能楽——さまざまな「現場」から」のセッションで、ペレッキアが「世界の能を目指す：宇高通成と国際能楽研究会」という題目で師匠である金剛流シテ方・宇高通成の背景や国際能楽研究会 (INI) を結成した意義や目標について述べた (ペレッキア 2015 年、49-60 頁)。INI は国外のイタリア、ブラジル、カナダにも支部があるとわかった。国外の 2 の INI ミラノ支部にも行く予定だったが、先方の指導者アルノーと予定が合わず、実施できなかった。研究代表者が参加できた【表 1】国内 3、4 と【表 2】国外 1、4 はエマートが中心的な指導者であった。詳細は次項で後述する。

②作品分析の対象となる英語能は、前述のエマートの定義に基づいて、能の手法を取り入れていて、かつ能の技法を学んだ演者による英語の能を【表 3】に纏めた。研究対象の作品は、英語能団体「シアター能楽」が上演したもの、あるいはそのメンバーが学生や他の団体と共演した作品である今回は、作品を入手できなかった。14 代目観世流シテ方・梅若猶彦、静岡大学名誉教授上田 (宗方) 邦義などは一覧表の分析対象から省いたが、これらも重要な作品である。

【表 3】 英語能の一覧表 (安納 2012、3 頁; Emmert 2008, 141-153;

[http://www.the-noh.com/jp/people/sasaeru/011\\_englishnoh.html](http://www.the-noh.com/jp/people/sasaeru/011_englishnoh.html);

<https://www.betweenstones.com/richard-emmert>; <https://www.theatrenohgaku.org/active-reperatory>;

<https://www.theatrenohgaku.org/past-reperatory>;

<https://www.theatrenohgaku.org/works-in-development>)

	英語能	上演年	作家	作曲家
1	At the Hawk's Well	1981、1982、1984、1985、1990、2002	W.B.イエイツ	R.エマート
2	Drifting Fires	1985、1986	J.パイチマン	R.エマート
3	St. Francis	1988 (1970 年初演の編曲)	L.ホルヴィック	L.ホルビック、R.エマート (編曲)
4	Eliza	1989、1990	A.マレット	R.エマート
5	Crazy Horse (改題: Moon of the Scarlet Plums)	2001 (改題: 2005)	E.エーン	R.エマート、D.パスキミン
6	The Gull	2006	D.マーラット	R.エマート
7	Pine Barrens	2006	G.ジオヴァニー	R.エマート
8	Crazy Jane	2007、2010	D.克蘭ドル	D.克蘭ドル
9	Sumida River (翻訳)	2008、2014、2015	観世元雅、R.エマート (翻訳)	古典の節付け、R.エマート (編曲)

10	Pagoda	2009、2011	J.チョング	R.エマート
11	Blue Moon Over Memphis	2013、2014、2015、 2016、2017、2018	D.ブラボート	R.エマート
12	Zahdi Dates and Poppies	2015、2016	C.プレストン	D.クランドル
13	Oppenheimer	2015	A.マレット	R.エマート
14	Gettysburg	2017、2019 (予定)	E.ダウド	D.クランドル
15	Emily	2018、2019 (予定)	A.ソープ	R.エマート
16	Phoenix Fire	2020 (予定)	K.サルフェン	K.サルフェン

分析のために、作家と作曲家にインタビューを行い、創立過程と作曲技法について確認した。

【表 3】記載の半分以上の作品の作家や作曲家にインタビューを実施した。インタビューを通して明らかになったのは、作家の能の知識と、能のリズムをどの程度理解しているかが英語能に表現されていることである。これらの分析を通して、異なるバックグラウンドを持つ作曲家により生まれ出てくる音楽がどのように違うのか、音楽の作曲技法、古典能の技法に基づいた能の謡や囃子の音楽的役割などを考察することができた。

#### 4. 研究成果

(1) 英語能の能指導プログラムは、指導者の能やその他の芸能に関する経験などによって異なることが明らかになった。前述のように、国外 1 は調査済みである。参与観察した国内外の能指導プログラムは、いずれもエマートが単独で、もしくは他の指導者と共に立ち上げて、主な指導者を務めていたものである。その理由は、本研究の準備段階から研究代表者がエマートから稽古を付けてもらい、研究代表者の業務上の予定でも参加することも可能だったからである。外国人向けの能指導プログラムは、アメリカやヨーロッパの夏休み期間を用いて、七月中旬から三週間続くものが多く、日本の夏休みとはかみ合わなかった。

【表 1】国内 3 の NTP-Tokyo と【表 2】国外 4 の NTP UK で顕著にあらわれていたのは、エマートの教育法では、師匠の動きを真似るような日本の古典的な指導法も見られ、他方で西洋的な指導法もあった。仕舞を部分的に説明し、途中で所作を止めて学習者からの質問にも答えていた。古典の指導法では、仕舞を一度に舞うことが多く、途中で止めることは好まれず、質問もあまり挟まれない。しかし師匠を真似て従い、言われた通りに動く古典の指導法は、質問をすること、疑問を持つことを基盤とした西洋の教育法に慣れ親しんだ学習者には戸惑いがある。その一方、エマートの指導の様子には、楽しく学び、質問しながら能を舞う学習者の姿が見られた。

【表 2】国外 4 の NTP UK は、2015 年に参与観察した。これは 2011 年に、レディング大学にいた Senior lecturer in drama のアシュリー・ソープとエマートが共に立ち上げたプログラムである。2013 年からソープが Senior lecturer in theatre としてロンドン大学ロイヤル・ホロウェイ校に移ったため、プログラムも 2014 年から同校に移行した。NTP UK は、【表 2】国外 1 の NTP-B の形を取っており、エマートが三週間指導し、喜多流シテ方・松井彬が一週間共に指導している。ロイヤル・ホロウェイの大きな魅力は、1991 年にジャパンフェスティバル実行委員会の三菱自動車から寄贈された「半田能舞台」という能舞台を持つことである『ロンドン大学 ロイヤルホロウェイの能舞台』パンフレット、2 頁)。学習者にとって、能舞台で練習できることは稀である。(ロイヤル・ホロウェイは、観世シテ方・梅若猶彦が博士号を取得した大学であるので、能との縁は深いとも言える。)

【表 1】国内 4 の NTP-Tokyo (別号 Noh Training Tokyo) も参加することができた。こちらも、エマートと NTP-B で教えていた指導者が関わっていた。本プログラムは、エマートが毎週土曜日に行っている NTP-Tokyo と同名であるが、主催者が異なる。2017 年より喜多能楽堂とシアター能楽主催で夏に行われる Noh Training Project-Tokyo は、六月下旬から三週間実施され、喜多流シテ方と玄人の囃子方が学習者に指導している。海外から学習者が来日し、日本の文化に触れながら稽古をつけてもらい、観能もできることで人気を集めている。並べてシアター能楽のメンバーが関わっているため、稽古の英語通訳や、英語による質問・指導に対応してもらえる。その上メンバーは、西洋の教育法を理解しているため、そのような教育的背景を持つ学習者に効率がよい学習法も提供できる。今後のプログラムでは、小規模な団体でのドリルを用いた段階的な教育法を用いる予定であり、いつも画期的なアイデアを実践している。

他の外国人向けの国内プログラムは前述したので、ここでは割愛する。

(2) 英語能の作品のうち、DVD が入手できなかった【表 3】12、まだ上演ツアーが発表されていない【表 3】14、15、16 は、現地 (主に海外) のリハーサルに行かなければ観ることができない。他の英語能は、DVD あるいは実際に観ることができた作品であり、研究代表者が共演した作品もある。調査を通して明らかになったのは、英語能の作曲家は、主にエマートかアメリカ人のデビット・クランドルであることだ。二人とも TN の創立メンバーで、アメリカで生まれ育ち、二十代で来日している。エマートは、アメリカで日本学を、日本で能のあらゆる要素を学んだ。クランドルは、アメリカでは作曲と日本学を学び、日本では主に宝生流のシテ方

として研鑽を積んだ。異なる背景をもつからこそ、生まれ出てくる音楽に様々な違いがある。二人の間で古典能の構造への忠実さ、能の音楽と西洋音楽の融合に対する意識、テキストのリズム、能楽囃子の手(手組み)などへの姿勢の違いが見られる。エマートは、英語のテキストより古典能の小段や囃子の手や旋律をより多く用いている。一方クランドルの作品には、西洋的な影響がエマートより強く表れており、西洋音楽の五線譜も謡本に取り入れている。テキストの自然なリズムを強調したいため、古典から少し離れて囃子の手をアレンジしている。だが二人は、それぞれの形で英語能の可能性を見出しながら自己表現をし、英語能を通して古典能の魅力を伝えたいと考えている点は共通しているといえるだろう。

本研究は、作家と作曲家の交流過程に焦点を当てたが、英語能には、いくつも交流過程があり複雑である。それは、①作家と作曲家の交流過程、②謡本を読む作家、作曲家と演者の交流過程、③演者、囃子方、作家、作曲家、演出家の交流過程、④作家と面打ちの交流過程、⑤作家と装束を作る能衣装の交流過程などがある。これらを通して、さらに舞台の試行錯誤を繰り返すことで、古典能のように余計なものを削ぎ落とし、観客の想像力を引き出し、心を動かし、関わっている人々はよりよい舞台を作ることに向かって努力している。本研究の音楽分析と作曲技法を調査した成果として、能に関わった経験がない作家が作曲家と向き合う前に、能の音楽について学べるよう、『手引き』の執筆を進めた。英語能の実例を多く含むため、作家の手助けになると考える。また能の多様なリズムを英語のテキストに乗せる実践的な手法を明らかにするため、研究代表者は第二次世界大戦中にカウナスの日本領事館領事代理だった杉原千畝を題材とした英語能の創作に取り組んだ。

とくに注目したのが、【表3】11の〈Blue Moon Over Memphis〉(BMOM)である。英語能で2013年の初演から毎年、上演されている。中には一日二回公演やミニ・ツアーなども含まれているため、同じ舞台が九回上演されたことになり、上演にパトロンを必要とする能では稀な例である。なお、研究代表者はこの九回の公演のうち七回は、笛の奏者を務めている。BMOMはエルビスに関する能であり、観客からの反響がよく、上演の回数が国内外で多い。殆どの方がある程度は知っているエルビスをシテが演じ、エルビスの曲が作品に盛り込まれており、能の謡の旋律で謡われている。笛もエルビスの曲を吹く。興味深いのは、BMOMは上演年を重ねても同じ演者や囃子方が毎回再結成されるわけではない点である。異なる演者や囃子方で上演した時に、演者と囃子方との間の取り方、演者と地謡(コーラス)との掛け合いやタイミングなどが変わってくる。

これまでの成果は、国内外の学会や一般者向けの発表を行っている。京都市立芸術大学日本伝統音楽センターのプロジェクト研究「音曲技法書(伝書)の総合的研究」や「音曲面を中心とする能の演出の進化・多様化」の研究会にも研究員として出席した。また研究代表者が、ミシガン大学日本研究センターのトヨタ招聘客員教授のポストが得られたこと、また能管に関する本を出版予定であることは、今までの研究が認められた証だと考える。

### 〈参考文献〉

- 安納真理子。「英語能の研究——シアター能楽の創作過程を中心に——」。東京藝術大学博士論文、2012年、34頁。
- 井上淳子(コメンテーター)。「《特別講演》京都でまなぶ、理解する日本芸能の意味」。『東洋音楽学会 西日本支部だより』第84号(2016年9月26日):2-3頁。  
<http://tog.a.la9.jp/nishi/bulletin/nishi084.pdf>。
- エマート・リチャード。「英語能」。『新版 能・狂言事典』、西野春雄・羽田昶(編)、258-259頁。東京:平凡社、2011年。
- ペレッキア・ディエゴ。「世界の能を目指す:宇高通成と国際能楽研究会」。『能楽の現在と未来』(能楽研究叢書5)、山中玲子(編)、49-60頁。東京:野上記念法政大学能楽研究所共同利用・共同研究拠点、2015年。
- Emmert, Richard. "English nō and Theatre Nohgaku—the how and the why." *Nō Theatre Transversal*, edited by Stance Scholz-Cionca, and Christopher Balme, 141-153. Munchen: Iudicium, 2008.

### ウェブサイト

- 中欧能楽文化協会。「ポーランドの能グループ『緑蘭会』」。各国の活動。2019年5月12日アクセス。<http://www.eu-nohgaku.com/ryokuranact.html>。
- 京都芸術センター。「トラディショナル・シアター・トレーニング(T.T.T.)」。事業紹介。2019年5月13日アクセス。<http://www.kac.or.jp/program/20474/>。
- the能ドットコム。「バラエティに富む、英語能の世界」。能を支える人びと。2019年5月13日アクセス。[http://www.the-noh.com/jp/people/sasaeru/011\\_englishnoh.html](http://www.the-noh.com/jp/people/sasaeru/011_englishnoh.html)。
- ロンドン大学ロイヤル・ホロウェイ。『ロンドン大学 ロイヤルホロウェイの能舞台~英国における日本文化の知識拡大を目指して~』パンフレット、2頁。2019年5月16日アクセス。  
<https://www.royalholloway.ac.uk/media/5190/%E3%83%AD%E3%82%A4%E3%83%A4%E3%83%AB%E3%83%9B%E3%83%AD%E3%82%A6%E3%82%A7%E3%82%A4%E3%81%AE%E8%83%BD%E8%88%9E%E5%8F%B0.pdf>。
- Between the Stones. "Richard Emmert." Our Story. Accessed May 13, 2019.  
<https://www.betweenthestones.com/richard-emmert>.

Noh Training Project UK. “Noh Training Project UK.” Accessed May 12, 2019.  
<http://nohtrainingprojectuk.org/>  
The International Noh Institute. “INI representatives.” Accessed May 12, 2019.  
<https://internationalnohinstitute.wordpress.com/about-us/ini-representatives/>  
Theatre Nohgaku. “Active Repertory.” Accessed May 13, 2019.  
<https://www.theatrenohgaku.org/active-repertory>  
Theatre Nohgaku. “Noh Training Projects US.” Accessed May 12, 2019.  
<https://www.theatrenohgaku.org/noh-training-project-us>  
Theatre Nohgaku. “Past Repertory.” Accessed May 13, 2019.  
<https://www.theatrenohgaku.org/past-repertory>  
Theatre Nohgaku. “Power Through Resistance: Noh Chant, Movement, Instruments.” Accessed May 12, 2019.  
<https://www.theatrenohgaku.org/noh-training-japan/power-through-resistance-noh-chant-movement-instruments>  
Theatre Nohgaku. “Works in Development.” Accessed May 13, 2019.  
<https://www.theatrenohgaku.org/works-in-development>

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計1件）

①安納真理子、「国境を越えた英語能—その魅力と問題点—」、『新しいパースペクティブによる日本伝統音楽シリーズ』、査読無、2016年、26-29、93-94頁。

〔学会発表〕（計8件）

①Mariko Anno, “Musical Instruments in Noh Drama: Role, Transmission, and Performance Practice in Traditional and Contemporary Noh,” Invited Lecture, Virginia Martin Howard Stearns Lecture, University of Michigan, Ann Arbor, February 12, 2019.

②Mariko Anno, “Tradition and Innovation in English-language Noh, *Blue Moon Over Memphis*,” Invited Lecture, Center for Japanese Studies Thursday Noon Lecture Series, University of Michigan, Ann Arbor, October 11, 2018.

③Mariko Anno, “Pagoda and Musical Structure: Adhering To and Deviating From Tradition,” Association for Theatre in Higher Education Conference (International Conference), August 12, 2016.

④Mariko Anno, “Noh Training Projects Overseas: Traditional and Contemporary Transmission Techniques,” Association for Asian Studies-in ASIA (International Conference), June 25, 2016.

⑤Mariko Anno, “Planes Intersect: Music-Text Dialogues in English Noh,” Musicological Society of Australia Conference 2015 (International Conference), October 2, 2015.

〔その他〕

ホームページ等

<https://annomariko.wordpress.com/>

## 6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。